

■（２０６）被災地にある寺のお坊さんの心配事

岩手県釜石市鵜住居町の常楽寺を訪ねると、高台の新しい本堂から離れた境内に石碑がある。「雪国の春 柳田国男 東北の風光の美しいのは…」。９５年前に訪れた民俗学者の作品が刻まれている。脇にあった本堂や山門は東日本大震災の津波で壊された。

歴史ある寺の前に広がるまちは壊滅状態で、檀家も約４３０人が犠牲になった。ただ、まずは生きている人らの支援や多くの遺体の身元確認の手伝いで精いっぱい、葬儀を営む時間も場所もない。すると、避難所で遺骨を抱える人に向けた陰口が聞こえてきた。「見つかったなら早く墓にあればいいのに」。互いに励まし合う雰囲気ではなかった。ならば、と合同で葬儀を営み、遺骨を早く墓に入れてもらうことにした。その後、復興に向けて次々と訪れるボランティアにも「あっちばかりに行き、こっちには来ない」と被災者が言い出す。様々な場面でぎすぎすする人々の心を、宗教家として静めようと努めてきた。

今年６月に本堂が再建され、地域のコミュニティの場が復活した。ただ、住職は言う。「復興の遅れから今、最も不満がたまっている」。心配は終わるどころか膨むばかりだ。（山）